

前回はK81 交響曲第44番ニ長調から始まりましたが、そのままモーツァルトの交響曲の世界を突っ走ったまま途中の交響曲第21番イ長調K134までしか聞くことができませんでしたので、この勢いに乗って、モーツァルトの交響曲の世界を最後まで走り続けることにいたします。

交響曲第22番から30番までは1773年から1774年の間に作曲されていますが、作曲順は必ずしも現在の番号順ではないことが半明されています。ちなみにケツヘル第6版によれば、作曲順に以下になっています。

交響曲 第26番 変ホ長調 K184/161a	1773	3月	3楽章	ザルツブルク
交響曲 第27番 ト長調 K199/161b	1773	4月	3楽章	ザルツブルク
交響曲 第22番 ハ長調 K162	1773	4月	3楽章	ミラノ・ウィーン
交響曲 第23番 ニ長調 K181/162b	1773	5月	3楽章	ザルツブルク
交響曲 第24番 変ロ長調 K182/173dA	1773	10月	3楽章	ザルツブルク
交響曲 第25番 ト短調 K183/173dB	1773	10月	4楽章	ザルツブルク
交響曲 第28番 ハ長調 K200/189k	1773	11月	4楽章	ザルツブルク
交響曲 第29番 イ長調 K201/186a	1774	4月	4楽章	ザルツブルク
交響曲 第30番 ニ長調 K202/186b	1774	5月	4楽章	ザルツブルク

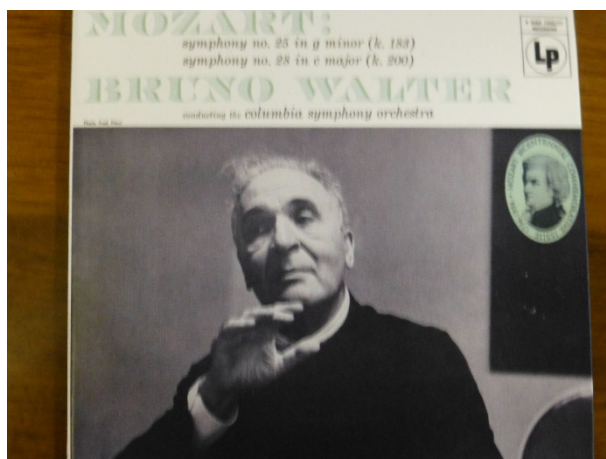
交響曲第22番ハ長調K162は、旧全集では1772年の作とされていましたが、現在では、1773年4月と推定されています。イタリアから帰っての影響が強く、ミラノとウィーンの混合であるとバウムガルトナーが述べています。全3楽章で、すべてソナタ形式で、提示部の反復はありません。弦楽器の他は、オーボエ・ホルン・トランペット各2本の編成で、特にトランペットはトロンベ・ルンゲ（ザルツブルクのドームの行列で使用される長いラップ族の楽器）と指定されていますが、現在は普通のトランペットで代用されています。10分足らずのとても可愛い佳曲です。

第23番ニ長調K181/162b、第24番変ロ長調K182/173dA、第25番ト短調K183/173dBと続く3曲の交響曲は1773年5月から10月にかけてザルツブルクで作曲されました。

交響曲第23番ニ長調K181/162bは、ニ長調の明るさと楽しさに満ちた素晴らしい佳曲で、違った性格の3楽章が単楽章のように続いています。第2番と同じく弦楽器の他は、オーボエ・ホルン・トランペット各2本の編成です。

交響曲第24番変ロ長調K182/173dAも、短い3楽章からなる10分ほどの曲ですが、第23番の後で、7月から9月にかけてウィーンへの旅行があったことで、展開部やコーダの扱いがウィーン的（提示部の反復がないところはイタリア的なものに対して）と思われる。

続く**交響曲第25番ト短調K183/173dB**は、初めての短調の曲で、その劇的な第1主題は、今までの心地よい作品とは一線を画す作品であり、録音も数知れなく、**歴代の名指揮者たち**※が取り組んでいるので、私もすでに若い時に耳にしていました。果てしない道のりを歩き続けてきた身が輝き溢れる瞬間に遭遇したといってもよいほど感動に満ちた作品だと思います。下記※のように、いくつもの演奏を聞きましたが、演奏時間は、テンポや反復の違いもあって17分から26分までさまざまな演奏があります。



※歴代の名指揮者たち：今回聴いたのは、この全集では、マリナー指揮アカデミー室内管弦楽団とヤープ・デル・リンデン指揮アムステルダム・モーツァルト・アカデミー（古楽奏法）の演奏ですが、それ以外にワルター指揮ニューヨーク・フィル、同じくワルター指揮ウィーン・フィル、クレンペラー指揮フィルハーモニア、岩城宏之指揮オーケストラ・アンサンブル金沢、あとはネット

で、ベーム指揮ベルリン・フィル、バーンスタイン指揮ウィーン・フィル、ブリュッヘン指揮ザルツブルク・モーツァルテウム（古楽奏法）、タカーシュ・ナギ指揮ワイバルク室内管弦楽団（古楽奏法）などです。それぞれの演奏がいずれも味わい深く、とても楽しめました。やはり基本の音楽がしっかりとできているからでしょう。その中でもワルター・ウィーン・フィルのザルツブルク音楽祭でのライブ録音は、臨場感あふれる感動的な演奏に感じられました。

交響曲第 26 番変ホ長調 K184/161a は第 1 楽章の写譜の初めに 1773 年 3 月 30 日の記入があり、ミラノからザルツブルクに帰って最初の交響曲で、イタリア序曲的な傾向の切れ目なしに演奏される 3 楽章よりなる演奏時間 10 分足らずの陽光を感じさせる佳曲です。管楽器編成は、フルート・オーボエ・ファゴット、ホルン、トランペット各 2 本と充実しています。

交響曲第 27 番ト長調 K199/161b は、前曲に続いてイタリア的シンフォニアで、第 2, 3 楽章は続いて演奏されます。管楽器編成は、フルート・ホルン各 2 本と小さいものです。

交響曲第 28 番ハ長調 K200/189k は、第 25 番（1773 年 10 月）の後の 1773 年 11 月にザルツブルクで作曲され、25 番のト短調は正反対に、明るく若さ溢れる 4 楽章の作品です。オーボエ・ホルン・トランペット各 2 本に加えティンパニも入っていることが、一層ドラマチックに仕上がっています。

交響曲第 29 番イ長調 K201/186a は、1774 年 4 月 6 日にザルツブルクで完成された逸品で、編成は小さい（弦の他はオーボエ・ホルン各 2 本）ですが、構想は雄大でピアノで始まるゆったりとしかも推進力溢れた印象的な旋律に、一瞬にして引き付けられます。全 4 楽章で、演奏時間も 20 分以上になり、演奏によっては 30 分を超す録音もあります。第 25 番と並んで 20 番台の交響曲の双璧といえましょう。

交響曲第 30 番ニ長調 K202/186b は、1774 年 5 月 5 日に完成。編成は第 22 番と同じで、トロンペ・ルンゲというトランペットが使われている点が珍しい。4 楽章で 18 分くらいの演奏時間ですが、前曲に比べて、軽快な感じであり、あまり演奏される機会もありません。

この後次の第 31 番までの 4 年間の空を経て、1778 年 6 月 12 日パリで作曲されたのが、**交響曲第 31 番ニ長調 K297/300a 「パリ」** です。これは、ただ単にパリで作曲されたと言うだけでなく、パリの人の好みに合わせて音が派手で豪華な編成で、初めてクラリネットが入っているだけにとどまらず、フルート、オーボエ、ファゴット、ホルン、トランペット各 2 本にティンパニが弦楽器に加わった大きな編成です。3 楽章（アレグロアッサイ、アンダンテ、アレグロ）からなる簡潔なものですが、第 2 楽章アンダンテ（98 小節）については、パリ人に合わせたより簡潔な版（58 小節）もあります。初演は後者の短いアンダンテでしたが、現在では本来の前者のアンダンテが演奏されています。手持ちの CD でも、前者のアンダンテで演奏されていますが、その後に後者の短い版も添付されています。

続く**交響曲第 32 番ト長調 K318** は、第 31 番の翌年 1779 年 4 月 26 日にザルツブルクで作曲されました。全 3 楽章（アレグロ・スピリトソ、アンダンテ、テンポ・プリモ アレグロ）が切れ目なしに演奏されます（演奏時間 9 分）。同年作曲された歌劇「ツァイーデ」の序曲として作曲されたなどの説があります。

交響曲第 33 番変ロ長調 K319 も 1779 年に作曲されました。第 3 楽章のメヌエットだけは、違った五線紙に書かれているので、最初 3 楽章構成だったものが、メヌエットを追加して、全 4 楽章（アレグロ・アッサイ、アンダンテ・モデラート、メヌエット、アレグロ・アッサイ）としたものと思われます。特に第 1 楽章展開部で、ジュピター交響曲の第 4 楽章のフーガ主題に用いられた旋律が流れてきたときには、びっくりしたものです。最近では演奏されることも多くなってきたように思います。

交響曲第 34 番ハ長調 K338 は、1880 年 8 月 29 日にザルツブルクで作曲されました。第 32, 33 番と並んで、彼の故郷ザルツブルクで作曲された最後の交響曲となります。一般的には、アレグロ・ヴィヴァーチェ、アンダンテ・ディ・モルト、アレグロ・ヴィヴァーチェの 3 楽章演奏されますが、ハ長調のメヌエット（K409）を加えて演奏する例もあります。（例えばベーム指揮のグラモフォンの交響曲全集録音）

いよいよこれからはザルツブルクを離れ、ウィーンやリンツで作曲された交響曲となります。

交響曲第 35 番ニ長調 K385 「ハフナー」 は、1776 年 7 月にザルツブルク市長ハフナー家の婚礼祝に作曲されたセレナーデ第 7 番 K250(248b)「ハフナー」とは別に、その息子が貴族に列せられた祝典用に 1782 年に作曲された 6 楽章のセレナード風の管弦楽作品から、最初の行進曲と 5 曲目のメヌエットを除いて、転用された 4 楽章（アレグロ・コン・スピリト、アンダンテ、メヌエット、プレスト）からなる明るく勢いのある名曲です。

交響曲第 36 番ハ長調 K425 「リンツ」 は、その名前のように、1783 年秋にリンツで作曲初演されました。父の反対を押し切って前年にウィーンでコンスタンチェと結婚したのち 1783 年にザルツブルクの父を訪ね 10 月末にウィーンへ帰る途中に立ち寄ったリンツで、急遽書き上げて当地で初演されたものです。続く**交響曲第 37 番ト長調 K444/425a** は、現在では序奏部分のみモーツァルトが



作曲したもので残る3楽章はミハエル・ハイドン作曲に

Michael Haydn

なります。これは、前曲のリンツ交響曲と同じ日に演奏されたもので、モーツァルトの手元にあったミハエル・ハイドンの3楽章のト長調の交響曲にモーツァルト自身が序奏(20小節)を書き加えて演奏し、そのままモーツァルト自作と間違えられて、旧全集では第37番となったものの、その後この事実が判明し、モーツァルト作品目録からは除外されることとなりました。

交響曲第36番の後は、3年間は協奏曲の作曲が中心となり、1786年12月6日にしてやっと**交響曲第38番ニ長調 K504「プラハ」**がウィーンで作曲されました。しかし実際に演奏されたのは、「フィガロの結婚」のプラハ上演の前夜1787年1月19日で、プラハで初演されたことから、この曲が「プラハ」と呼ばれているのであります。

ウィーンに移ってからのモーツァルトは、交響曲に対して消極的で(「ハフナー」はザルツブルグのために作曲され、「プラハ」もウィーン以外で演奏するために作曲された)、3年間は作曲されなかったのですが、1788年の6~8月の2か月余りの間に最後の3つの交響曲 交響曲第39番変ホ長調 K543、交響曲第40番ト短調 K550、交響曲第41番ハ長調 K551「ジュピター」を一気に書き上げたのでした。

短時間のうちに作曲されたにもかかわらず、その3曲は3様の違いを持ち、楽器編成においても変ホ長調はオーボエが省かれ、ト短調ではトランペットとティンパニがなく、しかも作曲当初はクラリネットもなかったし、ハ長調でもクラリネットがありませんでした。しかもいずれの優劣もつけがたく、私などその時の気分で、ゆったりとした気分の時は変ホ長調、悲しい時はト短調、気分を高めたいときにはハ長調と聴き分けることが多いです。

交響曲第39番変ホ長調 K543は、優美で平和な幸福感に満ちた作品で、生活費にも苦勞していた彼の苦境や心労は、その痕跡すら感じられません。第3楽章のトリオの旋律は、トヨタ・マスターズプレイヤーズ・ウィーンのテーマ曲イントラダに転用され、一層私の心の中で歌われています。

交響曲第40番ト短調 K550は、当初はクラリネット無しでしたが、改稿に際して2本のクラリネットを追加し、オーボエパートの多くをクラリネットに変えて音色を暗くしています。現在では、ほとんどクラリネットを加えた改稿版で演奏されていますが、手持ちのCD全集には、初稿版と改稿版の両方が収録されており、貴重な初稿版も聴くことができました。

交響曲第41番ハ長調 K551「ジュピター」は、まさにモーツァルトの交響曲の最後を飾るにふさわしい傑作で、「ジュピター」の名の由来ははっきりしなかったのですが、現在では、ヨハン・ペーター・サロモンが、特に終曲を器楽作品の最高の座を占める「ジュピター」といったことから、その命名にふさわしい曲という事で、現在ではだれもが認める名称となっています。かつて岩城宏之指揮のオーケストラ・アンサンブル金沢が、何年にもわたって、このモーツァルトの交響曲全曲演奏会を行い、その最終回最後にこの「ジュピター」の演奏を聞いたときには、その神々しさに涙が止まりませんでした。

第37番を除く、第35番から第41番までの6曲を、後期6大交響曲と称して、その録音も数知れず、当会の会員の皆様もよくご存じの曲ばかりと思います。その中のいくつかを聴きましたが、私にはパブロ・カザルスが指揮したマールボロ音楽祭オーケストラ(第36番のみプエルト・リコ・カザルス音楽祭オーケストラ)の演奏が一番心に迫るものに思えます。未聴でしたら、ぜひ聴いていただきたいものです。



Johann Peter Solomon



以上で、交響曲巡礼を終え、次の機会には、また巡礼の旅に戻り、K82 から再出発いたしましょう。

(続く)